

「知のオントロジー」—現代思想の構図— : (5/9)

by 佐伯 守 (2000.12.25、萌書房):

IV. 回帰性の構図

(transformed by Takaya Endo)

- 4.1 生命体を〈主体〉としてみる発想は
- 4.2 バックルは物ではなく、ある回帰的事態の出現それ自体
- 4.3 モランの思想をもう少しみつめる
- 4.4 具体的に〈分離と結合〉という点にふれる

4.1 生命体を〈主体〉としてみる発想は

ところで、生物体を〈主体〉としてみる発想はフォン・ヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』(木村敏他訳)にもみられます。生物学的行為においては、知ること、運動すること、存在することに区別はなく、それらの状態・形態〈ゲシュタルト〉は、〈環[クライス]〉をなして連続的・相即的である、ということが書名の意味するところです。〈環〉は〈回路〉と同義です。知覚はM.シェーラー流に言えば世界への〈関与〉(Teil-habe部分-所有)であり、ベルグソン流に言えば世界の〈凝縮〉行為であり、いずれも〈この世界〉を、環境世界として所有すること、〈われわれの環界へと狭めること〉(ヴァイツゼッカー)です。〈一部をもって全体を代表させる〉(pars pro toto部分=即=全体)ことが、つまり世界という現実についてなに 事かを記述することが、知覚のはたらきだということです。

ヴァイツゼッカーは次のように言います。

(1)

「主体は、物理学的世界の無限で恒常的な量的多様性に対置されていながら、これとの出会いにおいては自ら有限な数の質だけに限るのである。だから主体にとっては、一つの質が無数の量的変様を代表している。生物学的行為は、質の断続を一種の量の質化として行なった。そしてこのことは生物学的行為の主体的制限を意味し、恐らくはまた量のはてしない無際限性からの脱出をも意味している。」(前掲『ゲシュタルトクライス』V)

この〈主体的制限〉は肯定的な意味あいのもので、制限=縮小によって世界を主体的にわがものにするわけです。そこに〈主体性〉がありますが、しかしそれを物のように対象化することはできません。ヴァイツゼッカーの言う〈根拠関係〉はその点に関連します。こうです。

(2)

「生物学的運動がその本質上、位置の移動としてではなく自己運動として現出するのと同様に、生物学的生成一般も原因[カウザ]と結果[エフェクトウス]との一貫性としてではなく、自発的生起として現出する。〔中略〕生物学の経験するのは、生きものがその中に身を置いている規定の根拠それ自体は対象となりえないということである。このことを生物学における「根拠関係」Grundverhältnis と呼ぼうと思う。生物学を支配している根拠関係とは実は客観化不可能な根拠[グルント]への関わり合い[フェアハルテン]であって、因果論にみられるような原因[ウアザツヘ]と結果[ヴェイル

クング]のごとき認識可能な事物の関係ではない。)(同上)

原因と結果、前提と帰結、初めと終りといった区分・区別にみられる根拠関係は、陳述や事物のためのものであり、生命過程には適さない、と指摘されているわけです。根拠・根底はくすべてのものがその上に安らっている処)であって、物事の理由(ratio)ではない、とは M.ハイデッガーの弁です(辻村公一他訳『根拠律』「講演」参照)。

陳述・言明の根拠(=なぜか=理由)にしる、物事のありさまに関する根拠にしる、それらは要素還元主義的な視点から捉えられるのが通常です。出発点と帰点とにこだわらない回帰性、それがE.モランのいう(回帰循環する回路)にあたります。認識する主観の側にも、認識される客観の側にも、認識の根拠をおかない、という考えがモランにはあります。

〈根拠の問題を位置転換し、乗り越えること〉がテーマであったことを、モランはこう言います。

(3)

「実を言えば、われわれは、はじめから、語の石工・建築的意味あいでの根拠[土台]という観念を遠ざけてきた。そして、われわれは根拠とは違ったものを探求してきた。」(大津真作訳『方法3 認識の認識』「第一部のまとめ」Ⅲ)

(4)

「われわれは、根拠という観念にかえて、生きた自己=生態=組織の原理を持ってきた。この原理それ自身のうちには、認識次元が含まれている。」(同上)

こうした反根拠主義や反理由主義は、反ロゴス中心主義とかさなり、またG・ドゥルーズの(無根拠)の思想にもかさなります。なにかであるためにはなに故に根拠(根底、土台、理由)が必要であるのか、という問いは最終的には(神)の要請にいたります。実体的なく根拠)を排すとは、すべてを中間的・途上のものとみることです。(初め)と(終り)はたがいに回帰しあい、その両者の関係を中間化します。組織も秩序も、中間的なものとなります。

モランのいう(回帰バックル)は、(存在)ということをも可能ならしめる思想的な内容をもっています。---バックル(bacule)とは、かんぬき、留め金、つまりはバンドのバックルのことです。(存在)はバックルとともに出現し始まる、といった存在論を、モランはつぎのように言います。

(5)

「バックルは産出すると同時に産出される。それは生産すると同時に自己[スワ]を生産するものである。[中略]バックルの手前にはなににもない。無ではなく、想像しえないものと認識しえないものがある。バックルの手前には本質はない、実体はない、現実的なものすらない。現実的なものは、組織を作り出す相互作用のバックルを通じて、客体と主体の関係のバックルを通じて、自分を生産する。／ここで大きな基本的改革が行なわれる。認識のために出発点となる本体---現実とか物質とか精神とか対象とか秩序とか等々---などもはや存在しない。これらの本体を産出する循環ゲームが存在する。これらの本体は生産における同数のモメント[契機]として現われる。今度は存在論的主権をきそい合うアンチノミー的[二律背反的]な本体の間に峻厳な二者択一など存在しない。古典的な一大二者択一、すなわち(精神)と(物質)、(自由)と(決定論)は眠りにつき、廃物となり、われわれにとってはすたれたものと映る。」(大津真作訳『方法1 自然の自然』「結論Ⅱ」)

4.2 バックルは物ではなく、ある回帰的事態の出現それ自体

バックルはむろん物ではなく、ある回帰的事態の出現それ自体をさすことばです。バックルのいのちは(回帰)です。これは遠心力と求心力との合流・合体现象のごとき(渦巻)でイメージ化

されます。その〈回帰的な回轉〉のイメージは、ニーチェのいう〈永遠回帰〉の思想につながります。根拠や目的ということから解放された〈回帰〉のなかで、〈存在〉は存在する、というわけ değildir。渦巻形は、シンボリックにも〈原[アルケー]-形態〉であり、あらゆる生成がそこに凝縮されています。

回帰過程とは、〈過程の最終状態ないし結果が、初期状態ないし初期原因を生産する〉といった、自己生産、自己産出の循環性のことであり、遡及作用(feedback送り返す・与え返す)とは一般に、〈作用を生みだす過程〉にまで遡って効果をおよぼすことを言います。ある〈全体〉が、その源泉たる諸要素や契機にまで遡って効果をおよぼし、その効果がさらに逆に〈全体〉のありさまに影響をおよぼす、といった事態は日常的にもみられます。回帰とバックルの関係も、多様かつ複雑です。すべては動きのなかにあります。モランはこう言います。

(1)

「渦巻形はその主要な本性を開示する。回帰的な回轉がそれだ。自己を生産する存在がなんであれ、あらゆる形態を通じてとどまっているもの、あらゆる発展を通じて展開されるもの——それはここでバックルと呼ばれている回帰的な回轉であり、このバックルは開放と封鎖、更新と反復、非可逆性と帰還、運動性と定常性、生成性と機械性を含む。回帰過程のいずれにおいてもつねに認められるものは、回路、サイクル、反復、再開、すなわち車輪だ。要するに実存というものはすべて、活動的な組織というものはすべて、車輪を形成する。」(同、第二部第二章VI)

(2)

「回帰的バックルのあるところでは、なにものといえども、流れ・損壊・更新と無縁ではありえない。組織それ自体が通過途上にあるエレメントで構成されている。それは流れ・損壊・更新によって貫通されている。不断の一般化したこの活動が定常状態を生産すること、やむことなき折り返し[ターンノウヴァー]が安定した形態を生産すること、間断なき変遷が存在を創造すること——[中略]回帰的な組織とはアンバランスのなかで・それを通じて、不安定のなかで・それを通じて、エントロピー増大のなかで・それを通じて、定常状態やホメオスタシス[平衡維持]を作り出す組織のことなのである。すなわち、或る一定形態のバランスや或る一定形態の安定性や或る一定形態の恒常性や正真正銘形態安定[モルフオスタシス]を作り出す組織のことなのである。」(同、I)

4.3 モランの思想をもう少しみつめる

モランの思想をもう少しみつめることにします。モランは、固定的なものや確定的なものからは出発せず、また、秩序と整合性とから成る統一体系的な〈全体性〉の完結化に向おうともしません。モランは言います。

(1)

「私にはアドルノが言いたかったことがわかる。「金体性は非真理だ。」世界を論理の内に閉じこめようとはかるいっさいの体系は、愚かな合理化だ。」(前掲『方法1』総序)

(2)

「価値あるただひとつの認識とは不確実性で養われる認識であり、生きているただひとつの認識とは自己自身を破壊する温度に保たれている認識なのだ。」(同上)

たしかにアドルノは、その『ミニマ・モラリア(三光長治訳、§ 29)のなかで、〈全体は真ならざるものである〉と語っています。これは、全体化のうちに完成化をみるヘーゲルへの異議 申立てを

意味します。

ところで、右にいう、テオドール・W・アドルノとは、次のように言った思想家です。『社会科学の論理』(アドルノ／ポパー他、城塚登他訳)から引用します。

(3)

「事態[ザツヘ]は、命題をいくつか結びつけた輝ける体系的統一に対しては反抗するのです。」(『社会科学の論理によせて』)

(4)

「理論は、いまここに固定されている対象の硬直さを解きほぐして、可能的なものと同現的なものとの緊張の場のなかに放してやらねばならない。つまり可能的なものと同現的なものとは、そのいずれもが相手の方を指示しているのでなければ、存在することさえ不可能なのである。いいかえれば、理論とは、無条件に批判的なものである。」(『社会学と経験的研究』)

ここにみられる論調は、すでにモランのうちに流れています。そしてモランを代弁するのは、おそらく次のアドルノのことばでしょう。

(5)

「弁証法的批判は、総体性の言いなりにならないもの、総体性に反抗するもの、まだ存在しない個別化の潜勢力としてのみみずからを保つものを、救い、確立するよう助ける。[中略]しかし総体性は、諸個人の眼に見えないよう蔽われている諸個人の社会的関係の総体と相互に重なりあっているから、同時にまた見かけ[シヤイン]であり、イデオロギーでもある。解放された人類はもはや総体性ではないであろう。総体性の即自存在は、それ自身が真の社会的基体であるかのように人間たちを欺すのであり、そのような意味で人間たちの不自由[解放されていないこと]なのである。」(『序論』)

総体性(全体性)がいわば二重底になっているということ、その表面の現実性のなかで諸個人は抽象化されていること、要するに〈総体性〉は、諸個人にたいして、欺瞞的に桎梏[*しつこく: 足かせと手かせ]としてはたらく要因を、みずからの内に隠しもっているということ、これらをその要点として指摘することができます。

モランがアドルノの反全体主義、反ナチズムの精神に共鳴する、その基盤の上に、モラン自身の『方法2 生命の生命』は成立している、といっても過言ではありません。モランの次のことばが、それを告げています。

(6)

「われわれはいまでは知っているが、調和や解決や無秩序の除去やいっさいの矛盾の超克や政治的完成といった考え方は、虐殺を引き起こす思想なのだ。」(大津真作訳『方法2』第五部第四章Ⅲ)

あるいは、ここに、『失われた範列』からの引用をつけ加えることも許されるでしょう。

(7)

「〔複雑性とは……〕組織の、事前に定められた図式[シエマ]に応じたさまざまな力の厳密な機械的応用に従わない一切のことである。」(第三部第二章)

モランは、複雑性の感覚をもつことは、〈連帯の感覚〉をもつことであると語っています。それは、個体・個別的なものに連帯する感覚です。その感覚が、モランの理論の核ともなっています。その点はきわめて重要です。

(8)

「連続的なもののために離散的なものを、規定されたもののために偶発的なものを、初期条件のために出現を、依存のために自立を、外的決定機構のために自己組織を、パターンと公式のために存在物を無視しがちなものはすべて、個体を無視しがちである。／不確定性、曖昧さ(すなわち複雑性)をのがれようとするものはすべて、個体の問題を迂回し、忘れがちである。したがって、個別的なものはつねに外的一般者とか優越した種属性の方へ連れ戻され——還元され——やすい。」(前掲『方法2』第二部第三章Ⅲ)

あるいは、つぎのことばも重要です。

(9)

「もはや秩序(無秩序を排除する)、明晰(ぼんやりしたものを排除する)、区別(支持・参加・コミュニケーションを排除する)、分離(主体・アンチノミー・複雑性を排除する)の原理に従うことなど問題ではない。言い換えれば、科学を論理的単純化に結びつける原理に従うことなど問題ではない。反対に肝心なのは複雑性の原理から出発して、分離されていたものを結合することだ。」(前掲『方法1』総序「谷間の精神」)

分離・単純化・還元・確定といった、明晰性(それは排除をめざす)をささえる方法をとらず、むしろ、相互依存や結合や重なり合いといった複雑性の要因を主たる思考の糧とする、ということです。排除と排斥は一つのことです。

右のように、モランは自分の発想の仕方を〈谷間の精神〉と名づけています。そして〈肝心なのは複雑性の原理から出発して、分離されていたものを結合することだ〉と言っています。一者と多様性(一と多)、秩序と無秩序、カオスとコスモスなど、単純な二元論のうちにも分離の固定化がみられます。一見、分離しているようなものを〈結合〉させる発想は、やや抽象的ながらつぎのモランのことばに示されています。

(10)

「〈一者〉の中心部に複雑性が、相対性・関係性・多様性・他者性・二重性・多義性・不確定性・敵対性として現われると同時に、それらの——おたがいに相補的で競合的で敵対的な——概念の結合において現われているのである。システムとは自分自身以上のものであり、以下のものであり、以外のものであるような複雑な存在だ。それは開かれていると同時に閉じられている。〔中略〕新しいタイプの知解可能性は、敵対する概念を結びつけること、多義性を結合すること、客体の現実的な複雑性および、客体を考える思考と客体との関係の複雑性を、理解することができなければならぬ。」(同、第一部第二章V)

4.4 具体的に〈分離と結合〉という点にふれる

では、もう少し具体的に〈分離と結合〉という点にふれることにします。特権的な秩序も、また特権的な無秩序も存在せず、たださまざまな秩序と無秩序が存在するだけだと、モランは言います。こうです。

(1)

「集合秩序(構造)、内的・外的束縛秩序、対称の秩序、安定の秩序、規則性の秩序、サイクル秩序・反復秩序、複分解の秩序(結晶)、交換秩序、調整の秩序、ホメオスタシスの秩序、制御秩序、操縦秩序、プログラム秩序、修復・再生の秩序、同等再生産の秩序、秩序の多様化という多様化の秩序。」(同、第一章V)

(2)

「複数の無秩序が存在する。不均等、擾[じょう]乱、渦乱流、偶然の邂逅[かいこう]、決裂、カタストロフィー[大震災]・変動、不安定、不均衡、散乱、分散、正のフィードバック、脱走[ランナウエー]、爆発がそれだ。」(同、II)

ここにみられるさまざまな秩序と無秩序とかく(関連)結合しあうわけですが、秩序は複合体や複雑性のそとに、それらと分離して存在するわけではありません。組織の秩序はその内部に或る種の無秩序をかかえています。こうです。

(3)

「秩序と組織の関係は循環的である。組織が秩序を産み、秩序——組織がそれを産んだ、つまり組織は秩序を共同生産した——が組織を維持する。この組織にかかわる秩序は、無秩序のうゑに建てられた、無秩序をしのぐ秩序であつて、さまざまな無秩序からの保護者である。同じ運動のなかで秩序は組織の「ありえなさ」を地域的な確からしさに変え、システムのオリジナリティーを守り、外部の無秩序(偶然、攻撃)と内部の無秩序(損壊、敵対の膨脹)に抵抗する孤島を形成する。」(同、第一部第二章IV)

これを逆に言えば、或る種の無秩序は、秩序の構成分子だということです。無秩序は両義的です。モランはこう言います。

(4)

「無秩序(偶然的行為、競争、葛藤)は両義的なものだ。つまりそれは、一方では社会的秩序の構成分子(多様性、多種性、柔軟性、複雑性)の一つであるが、他方から言えば、それは依然として、同時に無秩序、つまり解体の脅威でもあるのだ。……無秩序が維持している絶え間ない脅威は永遠の再組織化の複雑で生きた性格を、社会に与えるものなのである。機械的な秩序とは根元的に異なる《生きた》秩序は、絶えず再生してゆく秩序である。事実、絶えず無秩序は、あるいは組織によって吸収され、あるいは修復されて、それと逆のもの(位階づけ)に変身され、あるいは外部にかき出され(逸脱)、あるいはまた外辺部において維持される(周辺部の若者猿の群れ)。絶えず吸収され、かき出され、投げ捨てられ、修復され変身させられても、無秩序は絶えず再生し、そして社会的秩序もまた絶えず再生することになる。複雑性の論理、秘密、神秘と、自動組織化という言葉の深い意味が出現するのは、まさしくこのところだ。つまり、社会は、それが絶えず自らを自己崩壊させるが故に、絶えず自己を自動的に生産するのである。」(古田幸男訳『失われた範列』第一部第三章)

組織解体のさまざまな要因をかかえこみ、それらを活用しつつ、それらとともに、おのれを再生・再組織化していくというところに秩序が存在する、ということです。

カオス/コスモスについても結合関係をみるべきです。この点については次のモランの文章を掲げるだけにしておきます。大事なことは非還元的、非機械的、非一元的、非分離的ということです。

(5)

「カオスは、区別以前・分離以前・対立以前の観念だ。それゆえ、破壊力と創造力、秩序と無秩序、解体と組織、ヒューブリス[放逸]とディケー[規律]との間における無差別・混同の観念だ。／そしてそのとき、われわれに映ずるものは、コスモス[宇宙]発生[ゲネシス]はカオスのなかで、それを通じて行なわれるということである。まさしくカオスこそは、〈宇宙〉が解体すると同時に組織し、分散すると同時に核をおびただしく形成するという、二面的な現象のなかで、不可分のものである。／カオスなるもの、それは組織者としての解体である。それは、コスモスの破裂・分散・粉碎とコスモスの核化・組織化・秩序化との敵対的統一だ。素粒子・原子・天体の生成[ゲネシス]は、擾乱・渦乱流・逆流・分解・衝突・爆発のなかで、それらを通じて行なわれる。」(同、第一章Ⅱ)